

自己表現活動を目指したライティングの授業

宮 田 学

1. 「ライティング」の考え方と実態

大学生ともなれば、中学・高校での英語学習を通して英語の基本と語彙を学び、限られているとはいえ、英語で発信する力を身につけているはずである。ところが、平均的大学生は、かならずしもそうになってはいない。なぜであろうか。

1つは英語に対する姿勢の問題がある。日本人はともすると完璧な英語を求め、日本語なまりの発音、片言の英語、誤りのある英語ではいけない、という気持ちが強過ぎる。もう1つの理由は学習法にある。本来ならば、中学から高校、1年から2年へと学習を重ねるにしたがって、英語で表現できることが多くなるはずである。ところが、英文法、英文和訳、和文英訳などの学習活動に多くの時間を費やすため、与えられた英語を日本語に、日本語を英語にということはできても、学習した英語を「自分の立場で使う」ことがうまくできないのである。

周知のように、1989（平成元）年告示の高等学校学習指導要領において、「ライティング」という科目が初めて登場した。それ以前は、「作文（Composition）」「英語ⅡC」などと呼ばれていたものである。その後1999（平成11）年に改訂された現行の指導要領でも、同じ科目名が踏襲されている。「ライティング」という呼び方は、「和文英訳」との違いを意識し、書く活動の能動的、創造的側面に着目したものである。「自由英作文」あるいは「英文エッセイ」を書くことが、その代表的な活動となる。現行の指導要領では、「ライティング」の目標や言語活動を以下のように規定している（注1）。

〔目 標〕 情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

〔言語活動〕 生徒が情報や考えなどの送り手や受け手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。

イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。

ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。

その他、「文章の構成や展開などに留意しながら書く」とか「書く過程を重視する」などの留

意点が見られる。

このような学習指導要領の意図が実現されていれば、英語で発信する力を備えた高校生が大学に入ってくるはずである。そこで、実態を明らかにしようと、宮田がかつて所属したJACET (=大学英語教育学会) の「誤文研究会」では、大学1年生300名を対象にしたアンケート調査を1999年に行った。高校時代の3年間で「自由英作文」に取り組んだ回数をたずねたところ、「全然やらなかった」80名(27.5%)「1~2回やった」51名(17.5%)「数回やった」76名(26.1%)と、7割以上の人がせいぜい1年に1回程度しか取り組まなかったということがわかったのである(注2)。

2. 大学におけるライティング指導とライティング教材

高校でのこうした実態を踏まえ、宮田はライティング指導に関して「accuracyよりもfluency」「和文英訳よりも自由英作文」「形式よりも内容」という3つの提言をしてきた。習った英語を自分なりにどんどん使う機会を保障してやるのが、何よりも必要であると考えたからである。それを実現するために、人文社会学部の発足時(1996年4月)より、1年生向けの「英語リフレッシュI」の授業を中心に、望ましいライティング活動を目指した試みを続けてきた(注3)。

一方、大学生向けの英作文のテキストに目を向けてみると、従来の和文英訳を中心に編集されたり、パラグラフの構成法に重点を置いたり、あるいは、社会問題など難しいテーマに取り組みせたりと、宮田の提言に沿った授業を実現するのに適したものがあまり見当たらなかった。そこで、「誤りを気にしないで、どんどん英文で自己表現する」ことを念頭に置いて、自己表現活動をうながすようなライティング教材を自作することにした。まず、以下のような基本方針を立てた。

- ア) まとまりのある英文をたくさん書けるようになることを目指す。
- イ) 自分自身のことを英文で書くのに役立つようなモデルや例文を用意する。
- ウ) 大学生活や日常生活を振り返って、書くための素材を集める機会を与える。
- エ) 自然に話される英語を聞き取り、英作文に役立つ情報を収集する練習を行う。
- オ) 誤りをできるだけ減らし、書き手の意図を正しく伝えるための助言を与える。
- カ) よりよい英作文を書くためのヒントや情報を提供する。
- キ) 以上の学習を通して、さまざまな場面や状況において自己表現できる能力を養う。

このような方針に従い、本学の外国人教師の1人Joseph Stavoy氏とともに、英文パラグラフや練習問題を作成した。これを編集した教材が、“Can't Stop Writing<英語で書いてみよう>”と題するテキストとして、2005年2月に三修社より発行されることになったのである。

3. テキストの構成と活動内容

テキストは、まず“Warm-up Unit”で始まり、日本語を介入しないで英語で表現することに慣れるとともに、英文のパラグラフについての初歩的な学習を行うようになっている。学生たちは日本語の世界に安住していることが多いので、[Let's Remember]の問題で、先週の金曜日にどんなことがあったのかを思い起こさせ、英語の世界に引き込む。問題に取り組む前に、教師が英語で質問し、各自の答えを頭の中で考えさせたり、指名した学生に英語で答えさせるような活動をしておくと、スムーズに書き始められる。

それに続く本編では、ユニットのテーマを、大学生が自分自身のことを振り返って書くのにふさわしいもの、書きやすいものに絞った。つまり、大学生としての生活に足場を置いた内容を優先し、自分自身の生い立ちと家族、自分が通う大学とそこでの日課、友だち、アルバイト、週末の過ごし方、旅行、高校時代の思い出、などという身近なテーマを設定した。また、太田将人君、北川早苗さんという2人の主人公をはじめ、身近にいそうな大学生やその家族が登場し、“Warm-up Unit”から1つのまとまったストーリーが展開するように工夫した。最後の“Unit 12”まで通して学習してゆくと、主人公たちの人物像や他の登場人物との人間関係などがわかるようになっている。

各ユニットの構成と学習内容は以下のとおりであるが、[Let's Write]にいたるまでのさまざまな演習は英作文を書くための、いわば準備運動となっており、[Let's Write]の課題をこなすことが各ユニットの最終目標となる。

1) [Let's Pronounce and Learn]

ユニットに出てくる比較的難しい語彙、日本人が誤りやすい表現を取り上げてある。音声教材を併用して練習する。

2) [Let's Read]

モデルとなるパラグラフを読み（テープまたはCDで聞き）、英語の質問に英語で答える。奇数ユニットは北川早苗さん、偶数ユニットは太田将人君が書いたパラグラフとなっている。

3) [Let's Listen]

モデルとなるパラグラフを聞いて、その要点を英語または日本語で答えて表を完成する[Part A]の問題と、会話を聞いて設問に答える[Part B]の問題がある。[Let's Read]とは逆に、[Part A]の奇数ユニットは太田将人君、偶数ユニットは北川早苗さんの書いたパラグラフを聞き取る。[Part B]の会話には、この2人を中心に、いろいろな人物が登場する。

4) [Let's Answer]

自分自身のことを振り返って、15～20程度の質問に答える。質問に英語で答えたり、与えられ

た答えの中から選んだりしながら、自己表現するための素材を整理整頓し、ユニットのテーマに関して英作文する内容をふくらませる。

5) [Let's Practice]

日本の大学生がおかしがちな誤りを取り上げて解説してある。それを読んでから、誤りを訂正したり、正しい形に変えたりする練習問題に取り組む。問題に出てくる誤文例は、かつて宮田が担当したクラスの大学生たちが実際に書いた英作文に見られたものである。

6) [Let's Write]

ユニットの学習の総仕上げとして英作文を書くことになる。易しいものから難しいものまで、3種類の課題を用意した。[Task A] は [Let's Read] のパラグラフを自分の立場で書き換える問題、[Task B] は [Let's Answer] の答えをもとにしてレポート用紙1～2枚にまとめる課題、[Task C] はレポート用紙2～3枚を目標に自由に英作文する課題である。1つの課題を選んで英作文するように指示が与えられる。

7) [Writing Tips]

英作文上達法を伝授したり、英語の句読法や文章構成法の基本について解説する。

巻末には、自己表現に役立つ語彙を13の分野・項目別にまとめた“Word Bank”を収録した。各ユニットの [Let's Pronounce and Learn] を補うための語彙リストである。学生たちには、できる限り英語レベルで英文を綴ることを心がけてほしいのだが、よい表現が出てこない時には、日本語が頭に浮かんでくるに違いない。そんな時に手軽に利用できる語彙リストがあるとよいのではないかと考え、英作文する際に学生たちが一番困るとされる名詞表現を中心に整理、分類してある。

4. テキストを用いた授業展開

2005年度前期に、宮田が担当する「英語リフレッシュ I」（人文社会学部人間科学科1年Aクラス：27名）にて、“Can't Stop Writing”を用いた授業を実施した。計13回行った授業の内容を [資料1] にまとめておいた。各ユニットの学習には1授業時間を充てたが、ほぼ以下のような手順で行った。

(1) [Let's Pronounce and Learn] の学習（5分程度）

- 1) テープのあとについて発音練習
- 2) 必要な説明を加える
- 3) 再度テープを用いて発音練習

(2) [Let's Read] の学習（10分程度）

- 1) テープを聞きながら本文を黙読する
- 2) 質問に対する答えを記入する

自己表現活動を目指したライティングの授業

- 3) 答合わせ
- (3) [Let's Listen : Part A] の学習 (15分程度)
- 1) テープを聞きながら (2回) 表を完成する
 - 2) 答合わせ
 - 3) スクリプトの一部をブランクにした書き取り用紙を配布し、小テストとして実施する。
- (4) [Let's Listen : Part B] の学習 (10分程度)
- 1) 設問を黙読する
 - 2) テープで会話を聞きながら (2回) 答えを記入する
 - 3) 答合わせ
 - 4) スクリプトを配布し、テープで確認する
- (5) [Let's Answer] の学習 (10分程度)
- 1) 各自、自分の答えを記入する
 - 2) 残りは宿題とする
- (6) [Let's Practice] の学習 (15分程度)
- 1) 解説部分を指名された学生が読む
 - 2) 必要な説明を加える
 - 3) 練習問題の答えを記入する
 - 4) 答合わせ
- (7) [Writing Tips] の学習 (5~10分)
- 1) 指名された学生が読む
 - 2) 必要な説明を加える
- (8) 課題の指示
- [Let's Write] で取り組む課題 (最後のTask C) を確認して終わる

5. 自由英作文と誤文指導

(1) 英作文の提出と添削

“Can't Stop Writing”の目的は「誤りを気にしないで、どんどん英文で自己表現すること」にあるので、必ずしも英作文を毎回提出させる必要はない。英作文を書くだけでも抵抗を覚える学生もいるだろうから、提出を義務づけず、気楽に書かせたほうが良い。また、英作文を添削する必要もあまりないと考えている。少なくとも、英作文が提出されるたびに必ず添削して返すのは、かえって逆効果となるのではないだろうか。学生たちにとっては、添削されて赤ペンばかりが目立つ英作文を返されるのは、書く意欲が減退することになりかねない。「読みました」というサインだけする、読んだ感想を1行程度の英語 (または日本語) で書いてやる、添削しないで誤りのある箇所を示すだけにする、などの方法で返せばよい。課題を毎回提出させる場合には、これらの方法を適当に混ぜるといったやり方も考えられる。

宮田の場合は、2~3ユニット毎に1回 (合計4回) 提出させ、誤りのある箇所を指摘するだけにとどめ、評価をつけて返却した。この方法をとると、学生たちにとっては、2~3のテーマの中から好きなテーマを1つ選んで課題にじっくり取り組める。教師にとっては、英作文を点検する回数を少なく抑えられ、添削するほどの作業量でもないということで、ライティング指導につきものの負担を軽減することができる。

(2) 誤文指導

「誤文指導」とは誤りの発生を低く抑えるための指導で、宮田はこれを「使わせる指導」「まよめ指導」「治療的指導」など、7つのタイプに分けて考えている(注4)。自由英作文は、このうちの「使わせる指導」にあたる。日本の英語教育の現状は、学習した英語を「自分の立場で使う」機会がきわめて少ない。使う機会を設ければ、言語使用の量が増える。使用量が増えると誤りも増えるが、誤りを恐れていては何も始まらない。誤りを気にしないで、どんどん英文で自己表現することである。それが“Can't Stop Writing”の最大の目的であった。

ただし、学生たちがおかし誤りをそのままにしておくと、同じ誤りを繰り返すことになる。そこで「治療的指導」が必要となる。宮田が行った治療的指導は、個人レベルの指導とクラス全体を対象にした指導の2種類である。

(3) 個人レベルの治療的指導

05年度の「英語リフレッシュⅠ」の授業では、すでに述べたように、自由英作文の課題を合計4回提出させた。提出された課題は、次のような要領で返却した。

まず、英文を読みながら、文法的誤りや綴りミスに赤エンピツで下線や印を施す。インデントやパラグラフの構成についても、注意をうながす([資料2]参照)。読み終わったら、英作文の内容や誤りの数を考慮して、A、B、Cと+-を併用して9段階で評価する。これをひと通り終えた時点で、同じ評価をつけた作品を集め、そのグループ毎に再読する。これは評価を調整することが目的なので、英文を素早くサツとながめるようにして読むことになる。英作文を学生たちに返却する際に、赤エンピツで示された箇所について自分で修正を施すように指示する。

誤りを減らすために添削する、という教師もいるだろう。確かに誤りは個性的なもので、英作文を丹念に点検すると、書いた学生の特徴が浮かび上がる。しかし、すべての誤りを教師の手で直すのは、それに要した労力と時間には必ずしも見合っていない。教師による一方的な訂正作業によって英文を改良しても、学習者にそのような力がつくという保障はない。治療的指導において大切なことは、学習者自身の手で誤りをみつけ、誤りをなくせるように方向づけてやることである。誤りを指摘するだけにとどめるのは、そうした経験や方針に基づいている。

(4) クラスレベルの治療的指導

誤りは個人的な性格を備えているとは言うものの、日本人のおかし誤りには共通した一定の傾向が見られる。“Can't Stop Writing”では、[Let's Practice]にて大学生が過去におかした誤りを取り上げ、ユニット毎に特定の誤りに的を絞って解説するとともに、練習問題を盛り込んである。このセクションの学習で、日本人特有の誤りをかなり減らすことが可能だと考えているが、「英語リフレッシュⅠ」では、最初の課題を返却する前に時間を確保して、クラスレベルの治療的指導を実施した。

提出された課題を読みながら誤りを指摘する作業を行うことは、すでに述べたとおりである。

自己表現活動を目指したライティングの授業

これらの誤りの中から適当なものを選んで、順次ワープロ入力する。それを冠詞、前置詞、時制の誤りなどに整理・分類し、[資料3]のようなプリントを作成する。これを授業で配布し、「どこがおかしいか?」と問いかけて順に考えさせ、誤りの種類が明らかになったところで、正しい表現を確認する。この作業がすべて終わった時点で英作文を返却し、学生たちに自分の誤りを訂正させたのである。

6. 学生たちの反応

“Can't Stop Writing”を用いて進めた授業を、従来の和文英訳の授業と比較してその特色をまとめてみると、だいたい以下のようなようになるであろう。

従来のやり方	→	新しい方式
・ 予習が前提となる		・ 授業中に取り組む／課題がある
・ 主として「書く」分野に取り組む		・ 「読む」「聞く」活動と組み合わせる
・ 与えられた日本語を英文に直す		・ 自由な内容で英作文する
・ 英作文の内容は自分と直接の関係はない		・ 自分自身のことを英作文の対象とする
・ 黒板に書かれた英文が添削される		・ 全員の英作文が点検される
・ 音声面軽視の傾向		・ 音声面を重視（発音練習、聞き取りなど）

最後の授業にて、このような特色を確認したあとで、授業アンケートを実施した。その主な結果を[資料4]にまとめてみた。

新しい方式のライティング授業について（質問1）は、全員が「(とても)よかった」と回答している。その理由を多い順に整理すると、「自分自身のことを自由に書けた」「リスニングがためになった」「予習がなくてよかった」「英作文を先生にチェックしてもらえた」「いろいろな活動ができた」となる。以下に、代表的な記述を紹介しておこう。

- ・ 従来のものよりずっと実用的であるからです。「書く」「聞く」の両面を鍛えていくことによって、一方的でない、双方向的なコミュニケーションへと近づけたのではないかと思います。文法を気にしすぎず、とにかく書く！要は「伝える」ことが大事なのです。
- ・ 全員の英作文が添削されるのはうれしい。自分の興味あることの英作文のほうが日本語を英文に直すよりためになる。
- ・ リスニングが苦手なので、毎回やる聞き取りは勉強になりました。家でじっくり考えられるのが良かったです。予習がなくてありがたかったです。発表しなくていいことも良かったです。
- ・ 予習をしなくても責められないから。英作文がいつか役立ちそうな、自分自身のことだったか

ら。

- ・「聞く」活動がよいと思う。穴埋めで、英語独特の音のくずし方が少しわかるようになりました。英作文でも、誤りを指摘されて自分で調べるので、面倒だけれど、力がつく気がします。

「英作文するのに役立つもの」（質問2）に対する回答の上位に [Let's Read], [Let's Answer], [Let's Practice] の3セクションが入っている。身近な大学生が書いたパラグラフを読み、自分自身のことを振り返ることが英作文の構想に役立ち、誤りを少なく抑える学習が英文の質を高めるのに効果があったと考えていることがうかがえる。

「英文を書くことに対する抵抗感」（質問3）が「かなり／少しなくなった」という学生が21人（77.8%）、「英文で自己表現」する目標（質問4）が「多少達成できた」と考える学生が19人（70.4%）おり、ライティングの望ましい授業が多少なりとも実現できたのではないかと判断している。

「英作文の添削パターン」について（質問5）は、17人（63.0%）が「誤りを指摘するのみ」でよいと答えている一方で、9人（33.3%）が「誤りを直して」欲しいと答えている。こうした要望は、改善点（質問6）を書いてくれた16人のうち3人があげており、一部の学生に根強く見受けられる。改善点やその他の記述では、英作文のテーマに関するものが目立っていた。それらを含めて、主な意見を紹介しておこう。

- ・誤りを指摘されるだけなので、結局、どういう風にすれば良いのかわからなかったところがあったので、文法的なミスとかは直してほしいです。
- ・先生が大変でなければ、提出された英作文に1～2行でいいので、コメント等をつけてくださると、先生ともコミュニケーションがとれて良いのではないのでしょうか。
- ・英作文のテーマをもう少し幅を持たせたほうが良いと思います。何回か書くのに苦労しましたので...
- ・意外と書きにくいテーマが多かった気がする（3つのうち1つか2つくらいそういうのがある）。
- ・Unit 3つから選ぶときに、書きやすい（書きたい）ものが3つともだったり、3つとも気が進まないものだったりしたことが、英作文を書くときに困ったくらいでした。
- ・レポート2枚以上ってのは最初長いと思ったけれど、慣れてきました。よかったです。
- ・解答する時間を長くしてほしい。

7. 結びにかえて

日本の英語教育の現状をながめてみると、すでに述べたように、言語使用の場面が少なく、ラ

自己表現活動を目指したライティングの授業

ライティング分野では、英文を自ら綴る量が圧倒的に不足している。まずは書くこと、つまり fluency を目指すべきである。次の段階は、誤りを少しでも減らすように (accuracy に) 配慮して、英文の質の向上をはかることである。そして、最終的には、さまざまな問題に関して、自分自身の意見を要領よくまとめて書けるように努力することであろう。

“Can't Stop Writing” の最後の Unit 12 “My Opinion” は、さまざまな社会問題、教育問題、環境問題を考えるユニットとなっている。英語を使って「自己表現」できるようになった大学生には、少しレベルの高いエッセイ・ライティングやスピーチ、ディスカッションなどの活動に取り組んで欲しいと考えてのことである。

[注]

- 1) 文部科学省 1999 『高等学校学習指導要領』 pp. 126～127
- 2) 宮田学編著 2002 『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』 大修館書店 p. 7
- 3) 宮田学 1998 「新しい英語カリキュラムの展開—ライティング分野における誤文指導—」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第4号 pp. 21～40
宮田学 1999 「新しい英語カリキュラムの展開 (2) —教養英語の完成に向けて—」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第7号 pp. 1～18
- 4) 宮田学編著 前掲書 pp. 163～166

[資料1] 05年度前期「英語リフレッシュ I」の授業内容

-
- 1 Introduction in English／授業の進め方／Timed Writing-1
 - 2 Warm-up Unit／Unit 1 : Self-Introduction
 - 3 Unit 2 : My College
 - 4 英作文①提出／Unit 3 : Family and Hometown
 - 5 Unit 4 : Pastimes and Hobbies／Unit 5 : Weekends 前半
 - 6 Unit 5 : Weekends 後半／誤文の全体指導／英作文①返却
 - 7 英作文②提出／Unit 6 : Friends
 - 8 Unit 7 : High School Days
 - 9 Unit 8 : Part-time Jobs／英作文②返却
 - 10 英作文③提出／Unit 9 : My Future Plans
 - 11 Unit 10 : Travel and Shopping
 - 12 Unit 11 : Love and Marriage／英作文③返却
 - 13 英作文④提出／Timed Writing-2／Unit 12 : My Opinion／授業アンケート
-

[資料2] 個人レベルの治療的指導例

(誤りの箇所到下線や印を施した1回目の課題の実物コピー)

My name is Yoshiho Suzuki. I was born on April 21, so I'm now 19 years old. I am a freshman at the school of human society, Nagoya city University. I'll major in Early Childhood Education at sophomore. Because I want to be [✓]nursery school or kindergarten teacher. I like children very much. Children always give me vigor. To get [✓]qualification for being [✓]nursery school and kindergarten teacher, I chose my university. I wanted to pass the entrance examination, so I studied very hard every day. When I heard [^]my acceptance, I was very excited and very happy. Now, I enjoy my school life. I'm taking 15 courses this semester, including English, Chinese, and Psychology. I like Chinese best of all the classes. Chinese is very difficult, but very interesting to me.

[資料3] 全体指導に用いたプリント

Errors and Mistakes : Correct the errors.

- A 1 I have just moved to Nagoya city from Mie prefecture.
2 Now I live in Mizoho ward by myself.
3 My sister is a student of Sakuradai high school.
4 I belong to the department of Human Sciences.
- B 1 I love my hometown very much. Because Nishio is a very beautiful town.
2 I usually eat lunch in a classroom or outdoors. Because the cafeteria is very crowded at lunchtime.
3 Every day I am busy. Because I have to do cooking, washing and cleaning for myself.
- C 1 My father is office worker.
2 When I was junior high school student, I belonged to soft tennis club.
3 My favorite food is pasta, so I often go to the Italian restaurant with my friends.
4 I go to college by the subway.
- D 1 My hobby is playing the piano and drawing pictures.
2 I have various kind of work.
3 To become a kindergarten teacher is one of my dream.
4 So I dislike rainy day.
- E 1 I was born in December 11, 1975.
2 We often play cards in rainy days.
3 I am enrolled the School of Humanities and will major in psychology.
4 In this spring, I started to live by myself.
- F 1 I get much money because I worked five days a week.
2 I hope that she marry soon.
3 I save money to go to New Zealand.
- G 1 I want to independent from my parents.
2 French is very difficult for me. I can't speak very well.
3 After school, I work part-time job.

[資料4] 授業アンケートの結果 (2005年7月実施: 回答27人)

1. 新しい方式は従来のやり方と比較して、

ア	とてもよかった	14人 (51.9%)
イ	よかった	13 (48.1)
ウ	かわらない	0
エ	悪かった	0
オ	ずっと悪かった	0

※それはなぜですか?

2. テキスト“Can't Stop Writing”で、英作文するのに役立つものはどれですか。いくつかでもいいですから、選んでください。

ア	Warm-up Unit	4人 (14.8%)
イ	Let's Pronounce and Learn	5 (18.5)
ウ	Let's Read	12 (44.4)
エ	Let's Listen, Part A	5 (18.5)
オ	Let's Listen, Part B	3 (11.1)
カ	Let's Answer	11 (40.7)
キ	Let's Practice	11 (40.7)
ク	Writing Tips	9 (33.3)
ケ	Word Bank	7 (25.9)

3. 英文を書くことに対する抵抗感に変化は見られますか?

ア	抵抗がまったくなくなった	0人
イ	かなりなくなった	5 (18.5%)
ウ	少しなくなった	16 (59.3)
エ	以前とかわらない	6 (22.2)
オ	かえって抵抗感が増した	0

4. 「英文で自己表現できるようになる」という目標を達成できたと思いますか?

ア	かなり達成できた	0人
イ	多少達成できた	19 (70.4%)
ウ	どちらとも言えない	6 (22.2)
エ	あまり達成できなかった	2 (7.4)
オ	まったく達成できなかった	0

5. 提出された英作文の「添削パターン」は、次の3種類が考えられます。あなた自身は、どのパターンがよいと思いますか?

A	誤りをすべて直す	9人 (33.3%)
B	誤りを指摘するのみ (=今回のパターン)	17 (63.0)
C	添削しないで返す	0
AまたはB		1 (3.7)

6. 今後改善するとしたらどんなことが考えられますか、あなたの意見を述べてください。

7. その他、気づいたこと、言いたいことがあれば、書いてください。